

ムーアのパラドクスを解消する試み

北村 久

北海道大学文学部専門研究員

パラドクスはしばしばその解決を説明することが難しい。その例の一つがムーアのパラドクスである。このパラドクスは以下の形式を有する。

(1) p but I do not believe that p.

この場合、それには矛盾の直接的な現れはないがそれは意味直観に関して矛盾している。ムーア (1952:543) は以下の例を与える。

(2) I went to the pictures last Tuesday, but I don't believe that I did.

彼はこの例がそこで断定されていることは完全に論理的に可能であるが完全に言表上不合理なことだと言う。

本研究の目的は自然な仕方でムーアのパラドクスを解消することである。ムーアの文が孤立した文としてではなく会話上のコミュニケーションの中に埋め込まれた発話として見做されることを措定するのは合理的である。これに対する第一の理由は話し手と聞き手のいる発話からなる設定が現実的であることである。第二の理由はムーアの文を分析する解釈者が一種の聞き手であるという事実が当該の設定を自然なものにすることである。「会話」という単語で話し手と聞き手が存在する発話を意味することにする。この措定を使って、(A) 聞き手を含む言語使用者は話し手が自分自身の発話を、それが埋め込まれていない平叙文の命題であるとき、理想化されたレベルで知っているとして解釈するという合理的な前提と(B) 知識は真なる信念であるから知識は一種の信念であるという合理的な前提から、聞き手の知識状態の矛盾によって例示される会話に於ける矛盾を演繹するつもりである。つまり、我々は、ムーアのパラドクスの矛盾をこれら二つの合理的な前提から導出することによって当該のパラドクスに原理立てあり自然でかつ演繹的な説明を与えるつもりである。

その説明は以下のようなものである。

(3) 演繹

1 : p but I do not believe p. (ムーアの文)

2 : p (1と連言除去より)

3 : I know that p. (2と前提(A)より)

4 : I believe that p. (3と前提(B)より)

5 : I do not believe that p. (1と連言除去より)

6 : We obtain a contradiction. (4と5より)

以下の例がムーアの論点にとって問題であると言う人がいるかもしれない。

(4) $2+2=5$ but I do not believe that $2+2=5$.

この発話は額面通りには不自然であると観察することができる。しかし、それは自然であり得る。なぜならある計算機が「 $2+2=5$ 」であることを指し示しているが話者はこのことを信じていないと想定することが可能であるからである。しかし、この読みはより大きな設定に依存している。即ち、「 $2+2=5$ 」という部分はより大きな状況の中にある。この読みは意味論的な側面に関してムーアの文と異なる。なぜならそれは余分で特別な条件を有するからである。その読みは本分析と直接関連しない。従って、問題となっている発話は当該の意味で不自然であると言うことができる。それはなぜ不自然なのであろうか。

この問いを探求しよう。上の演繹の結果として、以下を採用する。即ち、話者のあることを言うという行為は話者がそのことを信じているということを含意する。そのとき話者のある事柄に関する不信は話者がその事柄を言うことができないことを含意することが帰結する。(4)に於いて、話者が「 $2+2=5$ 」を信じていないことは通常的事実として真であることを見て取るのは容易である。その含意の対偶とこの観察が与えられると、当該の話者は「 $2+2=5$ 」ということを行うことができない。しかし、話者は「 $2+2=5$ 」と言っている。よって、矛盾を得る。(4)の発話が奇妙に感じられることが帰結する。

本研究の含意は以下のようなものである。グライスの質の格率は論理的慣習を反映している。なぜなら特別な条件のないムーアの文は「**p** は **I believe p** を含意する」という発話を取り消すことができないことを示すからである。さらに、それは会話上のものである。なぜならそれは聞き手の知識状態の矛盾によって例示される会話上の矛盾に基づいているからである。よって、この格率は会話上で論理的で慣習的であるものの産物と見做される。「会話上の」という用語で論理の範囲の外のなんらかの要因を意味しているのではない。むしろ、この用語は会話の中に埋め込まれた何らかの現象を指すことを意図している。上の特徴づけが与えられると、当該の格率は会話上の推意の現象の背後にある会話上の要請とは異なる。即ち、この格率は、会話上の推意の問題ではなくて、慣習的な要請である。従って、問題となっている格率は合法的な会話の格率の集合の外に位置し、かつ、意味論と語用論の間のインターフェイスを構成すると提案する。後者に対する理由はそれが論理的慣習を反映しており、かつ、会話に於ける矛盾に基づいていることである。即ち、それは意味論的であり、かつ、語用論的なものである。このことは、意味論と語用論が相互排他的でないことを意味する。このことに対する理由は意味論的な特徴と語用論的な特徴が上の要請に於いて共起しているからである。本研究は両分野が互いに依存していると結論する。